

平成 9 年度試験研究成果

区分	指導	題名	黒毛和種放牧子牛のその後の産肉性		
〔要約〕 放牧された黒毛和種の肥育素牛を用い、県の生産技術体系の指標である生後27カ月齢、出荷体重700kgを目標に肥育を行ったところ、肥育開始時までの発育は劣っていたが、その後の発育は良好で、ほぼ目標を達成した。					
キ - ワ - ド	黒	毛	和	種	放 牧 子 牛
					産 肉 性
			畜産研究所 家畜育種研究室		

1. 背景とねらい

放牧された黒毛和種の肥育素牛は、舎飼の肥育素牛に比較し、月齢に応じた体重が小さく、見栄えが悪く、また、放牧子牛のその後の産肉性が不明であり、子牛市場での評価が低い。このことが黒毛和種の放牧拡大を阻害している大きな要因の一つである。

このため、放牧された肥育素牛を用い、その後の産肉性について検討した

2. 技術の内容

放牧された肥育素牛（生後297日齢、体重240kg）8頭を用い、生後27カ月齢で出荷体重700kgを目標に前期粗飼料多給型肥育を行ったところ、肥育期間中の増体は良好であり、1日当たり増体量は0.87kgが得られ、生後27カ月齢で体重696kgとなり、ほぼ目標を達成し、放牧子牛の産肉性が舎飼子牛に比較して劣らないことが明らかとなった。

- (1) 前期粗飼料多給型肥育は、肥育期間を前期と後期に分け、前期（210日間）は濃厚飼料を体重比の1.1%に制限給与し、ラップサイレージを飽食給与とする。後期は濃厚飼料を飽食とし、イナワラを2kgの制限給与とする。また、飼料は朝、夕の2回給与とする。
- (2) 供試した肥育素牛の肥育開始までの1日当たりの増体量（DG）0.6kg台4頭、0.7kg台3頭、0.8kg台1頭であり、肥育開始時までのDGと肥育期間中のDGの相関は-0.1でありほとんど関係なく、放牧子牛のDGが0.6kgでもその後の増体は良好に推移する。なお、終了時の最小体重は636kgであり、十分市場性を確保している。
- (3) 枝肉規格はA4：4頭、A3：2頭、B3：1頭、A2：1頭であり、一般出荷に比較しA5は少なかったが、ほぼ良好な成績であり、ロース芯面積、バラ厚等には大差はなかった。

3. 指導上の留意点

- (1) 供試牛の父系は鳥取系6頭、兵庫系2頭であり、外山畜産研究室で生産され放牧育成されたものである。
- (2) 子牛市場では、日齢を経たもの、体重の小さい牛は安く評価される傾向があるため、舎飼での発育遅延牛と区分するため、放牧経験牛であることを市場名簿に記載することを検討する必要がある、それでも放牧子牛が正当に評価されない場合は、経営内一貫、地域内一貫を推進していく必要がある。

4. 技術の適応地帯

県下全域

5. 当該事項に係る試験研究課題

〔肉用牛3〕-1-(2)-ア バイパス油脂給与が黒毛和種去勢牛の産肉性に及ぼす影響

6. 参考文献・資料

島根県畜産試験場報告：1984（黒毛和種去勢牛の理想肥育における粗飼料の有効利用に関する試験）

7. 試験成績の概要

表 - 1 発育及び枝肉成績

項 目	放 牧 子 牛 (n=8)	生 産 技 術 体 系	岩 手 県 内 一 般
導入時日齢 (日)	297 ± 28	274	298
導入時体重 (kg)	240 ± 33	280	298
出荷時体重 (kg)	696 ± 47	700	704
1日当増体量 (kg)	0.87 ± 0.07	0.77	0.65
終了時月齢 (月)	27 ± 0	27	30.2
冷屠体重 (kg)	425 ± 34	427	430
ロース芯面積 (cm ²)	50 ± 4	—	51
パ ラ 厚 (cm)	7.2 ± 0.6	—	7.3
皮下脂肪厚 (cm)	2.7 ± 0.6	—	2.3
歩留基準値 (%)	72.9 ± 0.8	—	73.4
脂 肪 交 雑 (BMS)	1.2 ± 0.3	—	1.8
飼料 摂 取 量	濃厚飼料 (kg)	3,506 ± 315	3,570
	ラップサイレージ (kg)	1,974 ± 69	1,450
	イナワラ (kg)	409 ± 98	700
総TDN摂取量 (kg)	3,274	3,277	—
1kg増体当TDN (kg)	7.2	7.8	—

岩手県内一般の数値は、「枝肉格付情報」(全国肉用子牛価格安定基金協会、及び日本食肉格付協会)及び岩手県の育種価評価結果(平成9年11月)より。